

—実践報告—

小児病棟の年間行事の現状分析と今後の課題

川根伸夫¹ 兼安正恵¹ 白坂真紀² 桑田弘美²

澤井俊宏³ 太田 茂⁴ 藤野みつ子¹ 竹内義博³

¹滋賀医科大学医学部附属病院 ²滋賀医科大学医学部看護学科臨床看護学講座

³滋賀医科大学医学部医学科小児科学講座 ⁴滋賀医科大学医師臨床教育センター

要旨

滋賀医科大学医学部附属病院 5A 小児病棟では、単調でストレスの多い入院生活を送る子どもたちの気分転換をはかり、治療意欲が継続するよう、職種間の連携と協働により子どもたちが楽しめる催し物を企画・運営している。今回、現在実施している小児病棟の 1 年間のイベント行事を振り返って現状を分析し、今後の課題を明らかにした。その内容は、1. 行事の企画・運営について、スタッフが共通認識をもって取り組めるようマニュアルを作成し、将来的に行事コーディネーターを育成する。2. 行事前後で担当者間のミーティング時間を確保し、記録を重ねることで行事内容の充実を目指す。3. より楽しく安全な行事開催のため、費用と人の確保の工夫が必要である。

キーワード: 小児病棟, 病棟行事

はじめに

入院することにより、子どもの社会とのかかわりは狭小化してしまう。これによって、入院中に子どもの社会性の発達が停滞や退行・歪曲をきたすと、コミュニケーションに問題が生じ、以後の治療や看護の展開の妨げになることが考えられている¹⁾。滋賀医科大学医学部附属病院 5A 小児病棟(以下、病棟)では、入院している子どもたちが楽しめる行事を開催している。小児看護領域において特に留意すべき子どもの権利として、遊びの機会の保証²⁾が明記されており、検査や処置を受けるなどストレスが多く単調になりがちな入院生活では、気分転換がはかれるような遊びやイベントの提供がケアとなり、子どもの治療への意欲を保持することにつながる。今回、1 年間の病棟行事の内容を振り返ってその現状を分析し、今後の行事運営の在り方についての課題を報告する。

倫理的配慮

本稿作成にあたっては、小児病棟責任者に報告の目的と内容について説明し承諾を得た。患児や保護者など個人が特定されないよう表現に配慮し、論文中の写真は本人の許可を得て掲載した。

病棟の概要

病棟は 31 床(内科 23 床、外科 8 床)、担当看護師制で、2 交代制の勤務体制をとっている。スタッフの構成は、看護師長 1 名、副看護師長 2 名、看護スタッフ 18 名、看護助手 2 名、クラーク 2 名、医療事務作業補助者 1 名、保育士 1 名である(2011 年 12 月現在)。診療対象は、神経、血液・腫瘍、循環器、内分泌、腎臓などの小児内科全般と泌尿器、耳鼻科、消化器などの手術症例の小児外科である。平均在院日数は約 2 週間であるが、日帰り入院などの短期や、半年から 1 年以上の長期にわたる場合も多い。2011 年の 4-11 月の小児科稼働率 98.7%、のべ入院数 498 件、のべ退院数 471 件である。

病棟の主な年間行事

2011 年 1 月～12 月に行われた病棟の行事は以下のとおりであった。*は院内学級の児童を対象にしており、**は病院や看護部主催の催し物である。

1. 春季

・ひな祭り(3 月 1 日)

2. 夏季

・ミッキーとミニーの来訪(6 月 16) **

・夏祭り(7 月 7 日)

- ・つぼみの会サマーキャンプ(8月10日～3泊4日)
- ・小児科サマーキャンプ(8月26日～1泊2日)

3. 秋季

- ・クリニクラウンの来訪(9月28日)
- ・アンパンマンショー(10月4日)
- ・「劇団かいつぶり」来訪(10月19日)*
- ・ハロウィーン回診(10月31日)

4. 冬季

- ・病院玄関イルミネーション点灯式(11月30日)**
- ・「劇団かいつぶり」来訪(12月16日)*
- ・病院クリスマスコンサート(12月14日)**
- ・クリスマス会(12月20日)

毎月のイベントとして、「ひまわりの会」によるお楽しみ会(毎月第3木曜日)と、栄養治療部よりイベント食の提供が行われている。

行事の紹介

以下、病棟内で開催された行事の内容を紹介する。

1. ひな祭り

今年のひな祭りは、ボランティアの協力により演奏会とバルーンアートが開催された。各種イベントは、プレイルームとディールームの移動式壁面を取り払って、場所を広くとって開催した。

2. ミッキーとミニーの来訪

今年の6月には看護部長のはからいにより、東京ディズニーリゾートから、アンバサダー(親善大使)、ミッキーとミニーの来訪が実現した。小児病棟だけではなく、NICU・GCU(新生児集中治療室・回復室)に入院している子どもと家族も喜んで様子であった。

3. 夏祭り

病棟の保育士と業務担当レクレーション係の看護師(以下、行事係看護師)を中心に、今年の夏まつりは「縁日」をテーマにして企画した。ヨーヨー釣り、輪投げ、ボーリング、パターゴルフ、魚釣り、プラバン作りや粘土工作など、子どもだけでなく保護者も熱中して参加していた。夏祭りの飾りやヨーヨー釣りの風船の空気入れなどは、子どもの母親より協力を得た。保護者らは飾りを丁寧に仕上げるなど、その準備期間から楽しんでいた。

4. 「つぼみの会」サマーキャンプ

I型糖尿病をもつ子どもと家族を対象とした家族

の会である「つぼみの会」の宿泊合宿が、毎年8月に3泊4日で行われている。主に外来通院している子どもと家族、ボランティアスタッフとして病棟看護師、看護学科・医学科学生、医師が参加している。キャンプの内容は、自炊体験、水泳、キャンプファイヤー、低血糖体験とその対応などである。子どもたちは毎年このキャンプを楽しみにしている。

5. 小児科サマーキャンプ

小児悪性腫瘍の子どもと家族を対象とした宿泊合宿が、2010年より毎年8月に1泊2日で開催されている。ボランティアスタッフとして病棟・小児科外来看護師、看護学科学生と大学院生、医師、病気を克服し成人した若者が参加している。キャンプの内容は、バーベキューや魚釣り、キャンプファイヤーなどで、今年は100名を超える参加者で充実した時間を過ごした。今後は宿泊期間を2泊3日に延長するなどの取り組みをしていく予定である。

6. クリニクラウンの訪問

平成21年8月を初回に、特定非営利活動法人日本クリニクラウン協会からのクリニクラウン(臨床道化師)の訪問を依頼している。「すべてのこどもにこども時間を」をモットーに、トレーニングを受けたクリニクラウン2名が病室を訪問し、遊びやコミュニケーションを通して闘病生活を送る子どもたちを支援している。子どもたちがクリニクラウンを追いかけると、笑顔で楽しそうに交流している姿が見られた。今後も定期的に訪問依頼を行う予定である。



7. アンパンマンショー

小児科医師が「がんの子どもを守る会(大阪支部)」に依頼し、闘病中の子どもたちのため「アンパンマンショー」のイベントを開催した。子どもたちは迫

力のある実写版アンパンマンショーに見入っていた。

8. 「劇団かいつぶり」の来訪

院内学級では、滋賀県を中心に活動している「劇団かいつぶり」が手品や演劇などを披露している。劇団との連絡は小学校教諭が担当しており、在籍している子どもたちの年齢に合わせた催しを考えるなどの打ち合わせをしている。

9. ハロウィーンの教授回診

2010 年から外国のハロウィーンの仮装パーティー行事を参考にイベントを企画している。10 月の最終月曜日の教授回診では、教授をはじめ、医師、師長と保育士が、かぼちゃやお化けのお面を被って、子どもたちにプレゼントを配りながら回診した。子ども達自身も個々のお面や仮装をして参加していた。これは病棟保育士が企画し、お面やプレゼント箱の作成は子どもの保護者の協力により準備ができた。

10. クリスマス会

今年初めて依頼したボランティアグループ「アップルミント」からは、ペープサートや絵本の読み聞かせ、合唱などの催しがあった。院内学級児童たちによるハンドベルの演奏会、看護学生からは子どもたち参加型の催し物である「大きなかぶ」の寸劇や、マルマルモリモリの歌と踊り、成人病棟の患者様からの草笛披露、医師が準備した特大シャボン玉で遊び、2 時間ほどのクリスマス会を行った。毎年 12 月 24 日前後の夜中には、サンタクロースに扮した医師が、眠っている子どもたちの枕もとに、ボランティアや看護学生が作成したクリスマスカードと文房具などのプレゼントをそっと届けている。翌朝、子どもが「サンタクロースって、ほんまにいてるんやで！」と驚きと喜びの表情で語ってくれる。



11. 「ひまわりの会」による月 1 回のお楽しみ会

病棟で入院・治療を経験した子どもの保護者の会である「ひまわりの会」がある。プラバンや松ぼっくりのクリスマスツリー作成、紙漉きなどの工作や、ハーブ演奏会、ビンゴ大会などのお楽しみ会が毎月一回開かれている。同日に、入院している子どもの保護者と会のメンバーが語り合える場を設けている。

病棟行事に関わる人々や部署

各種イベント行事は、病棟スタッフをはじめ、他部署の協力や応援により成り立っている。以下、病棟内と病棟外に分けて、その実際を述べる。

1. 病棟内

1) 看護師、医師、保護者

行事係看護師が、行事の中心となる保育士と協力して準備や運営を行っている。イベント当日は、看護師と医師が協力し、処置・ケアの時間と内容を考え、子どもたちがその時間帯に参加できるよう工夫して援助している。看護師と医師以外の医療事務と看護助手などのスタッフも行事の運営を支援している。行事開催にあたり、飾りつけやカードの作成などは保護者からの協力を得ている。保育士や母親同士で語り合いながら小物などを作成する時間は、形として残る作品が完成するという達成感もあり、ストレス軽減効果など、楽しいひとときになっているようである。

2) 保育士

小児医療現場では、2002（平成 14）年に保育士の配置に対して診療報酬加算が認められて以降、2006（平成 18）年にはプレイルームの設置および保育士の配置等の診療報酬加算が引き上げられた^{3) 4)}。当病棟でも 2008 年 11 月から小児病棟に保育士 1 名が配属となり、主に乳幼児を対象とした保育を行っている。病棟プレイルームにおいて、遊びを通して、療養生活を送る子どもたちの健やかな成長と発達を促す関わりをしている。疾患と治療を考慮しながら、子どもたちが年齢相応の生活習慣や社会性を身に付けられるよう援助している。保護者が入浴や買い物などの不在時には、子どもの預かりをするなど、特に母親が気さくに話をできる存在となっている。すべての病棟行事が保育士を中心に進められている。

3) 院内学級教諭(小学校)と訪問指導教諭(中学校)

小学校の院内学級教員は、子どもたちが主体として行う発表会や音楽会などを授業の一環として実施しており、それを保護者や医療スタッフ、看護学生が参観する機会を設けている。日頃は病気療養児の教育の役割としての学力の補償⁵⁾など、子どもたちの学習に重点を置いている院内学級でも、病棟行事がある場合はそちらを優先し、その準備と運営などの協力を得ている。年に2~3回、瀬田東小学校の教員とPTAの方々との交流会(工作や朗読会、音楽会、軽い運動など)が行われている。院内学級担当の教員だけではなく、小学校全体として協力しながら子どもたちの指導と支援にあたっている。子どもたちの前在籍校の教員と連絡を取り合い、退院後の復学が順調に進むよう調整している。ボランティアが作成した手作り小物などをプレゼントすることもある。

中学校の訪問指導教諭は、イベント開催時期に学習指導対象の中学生がいる場合に、クリスマス会の出し物などに参加している。

2. 病棟外

1) ボランティアスタッフ

病院ボランティアや、病棟に入院経験のある家族の繋がりより、ひな祭りやクリスマス会などで出し物をするボランティアグループが参加している。

2) 他部署

(1) 看護部、病院管理部門

毎月1回、小児病棟に入院する子どもの付き添いをしている母親を対象に、アロマテラピー施術者よりリラクゼーションケアが行われている。11月末日には、病院玄関に毎年飾られるクリスマスイルミネーションの点灯式が、数名の子どもたちと共に実施された。病院主催のクリスマスコンサートでは、保育士と看護スタッフが子どもたちと開催場所まで移動し、素敵な音楽会を楽しんだ。

(2) 栄養治療部

栄養治療部から月1回「イベント食」と称するお子様ランチが提供され、子どもたちもこの日の昼食を楽しみにしている。12月のイベント食メニューは、パエリア、クリスマスチキンフライブロッコリー添え、ポテトサラダ、コンソメオニオンスープ、クリスマスケーキであった。



(3) 看護学科・医学科

病棟では通年、看護学生と医学生の実習を受け入れている。実習中の看護学生や有志の学生たちから、その準備などの協力を得ている。夏祭りのお手伝いや、クリスマス会の出し物を自分たちで考え実施するなどである。楽しそうに行事に参加する子どもたちの姿から、学生はいつもとは違う子どもの表情を観察し、子どもの発育に必要な環境を学ぶ。学生自身も楽しく参加でき、印象に残るようである。看護学科、医学科ともに、学生・教員との連携を通して実施している。



現状分析と今後の課題

1年間の病棟行事を振り返り、その企画・運営について現状を分析し、今後の課題を述べる。

治療を受けている子どもには、特に安全面への配慮が重要である。治療による副作用で免疫力が低下していたり、自分自身の安全を守る行動が発達途上にある子どもたちの感染や身体損傷などを考慮した上で各種催しを考えている。しかし、行事の企画や

運営について細かい注意事項などを明記したものはない。安全には配慮しているが、スタッフやボランティアがより共通認識を持って取り組めるような安全指針を盛り込んだマニュアルなどの作成が必要ではないかと考える。

年間を通して多くのボランティア団体からイベント開催の申し出がある。現在、ボランティア団体との連絡・交渉やイベント行事の計画や開催については、師長が中心となって病棟管理の仕事と併せてコーディネーターの役割を担っている。催しを依頼するボランティアの選定基準として配慮していることは、子どもたちが楽しめる内容であること、安全であること、イベントの開催により病棟スタッフに過度の負担がかからないこと、日時が適当であることを重視している。村市ら⁶⁾は、病院総務課でのボランティア・コーディネーターの採用と活動を取り上げ、小児を対象とする施設において、安全や保育の視点からのボランティアの活動の有効性を報告している。これを参考に今後は、ボランティアの積極的な活用を目指し、病棟全体の状況を把握している病棟看護師の中から、行事全体のマネジメントを保育士と共に中心になって実施できる担当者（行事コーディネーター）を病棟内の新たな役割として設けることはできないか考案中である。

クリニック라운の訪問を例にとると、実施前後に師長と保育士、クリニック라운がミーティングを行っている。実施前は子どもたちの状況を伝え、実施後には子どもたちや家族の反応を振り返るなど、次回、より楽しい催しになるようにつなげている。このような準備や振り返りを毎回実施することで、より良い催しの開催につながると思われる。他のイベントでは実施できていないため、質の向上を目指すうえで、打ち合わせや振り返りの時間の確保と記録の積み重ねが大切であると思われる。

改めて1年間の行事を振り返ると、行事開催の時期と回数に季節や月ごとの偏りが見られ、下半期にくらべると上半期の開催はわずか2つであった。この理由として、特に1月～6月は、年末年始休暇、年度末から新年度にかけての新旧スタッフの交代など、イベント行事の開催が困難な状況があげられる。行事開催の場所としては、宿泊行事を除くほぼすべてが病棟内で開催されている。年間を通じての行事

を屋外で実施している施設もあり⁷⁾、今後は、季節が感じられる日本の伝統行事を多く取り入れ、病棟外で外気に触れられるような催しの実現できればと考えている。また、小児看護の対象は0-15歳と幅が広く、イベント参加者の年齢層によって、全員が楽しめるものを準備することが大切である。辛い治療生活の中でも希望となるよう、子ども達の気持ちを汲みとって工夫を重ねたい。

病棟行事は、財団法人和仁会と病院運営経費により運営されている。行事の回数を増やし、内容の充実をはかるには、予算の確保が必要である。小児科病棟看護師1人当たりの看護量の多さ⁸⁾、小児看護の業務量は成人看護の2～3倍である⁹⁾といわれているが、安全なイベント開催にあたっては、治療中の子どもを守る看護スタッフの確保も重要であると考え。病棟行事の準備時間の多くは看護業務に含まれておらず、イベント開催日には看護業務として扱っているが、ボランティアで参加し支援してくれる非番スタッフも多い。今後もボランティアや専門家の協力による行事の開催は必須であり、継続していきたいと考えており、他部署や他の職種との連携も今まで通り大切にしていきたい。

おわりに

1年間の病棟行事を振り返った。子どもたちの入院生活が豊かなものになるよう、今後、病棟内では以下の課題に取り組んでいきたい。

1. 行事の企画・運営について、スタッフが共通認識をもって取り組めるよう、手順や注意書きを記したマニュアルを作成し、将来的に行事コーディネーターを育成する。
2. 行事開催の前後で担当者間のミーティング時間を確保し、記録を重ねることで、行事内容の充実を目指す。
3. より楽しく安全な行事開催のため、費用と人の確保の工夫が必要である。

謝辞

入院生活を送る子どもたちのために、楽しい催しを提供し、その運営を支援して下さる多くの方々に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 塩飽仁：実践に必要な倫理的配慮と QOL. 浅倉次男監修：子どもを理解する「こころ」「からだ」「行動」へのアプローチ, 5-14, へるす出版, 2008.
- 2) 日本看護協会：小児看護領域で特に留意すべき子どもの権利. 小児看護領域の看護業務基準, 1999.
- 3) 江本リナ：病院における保育を巡る現状と課題. 小児看護, 32(8), 1020-1023, 2009.
- 4) 厚生労働省：平成 18 年年度診療報酬改定の概要について. 2011 年 1 月 23 日（入手日）
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/02/dl/s0215-3u.pdf>
- 5) 阪中順子：「院内学級」の役割と課題および医教連携の留意点. 小児看護, 30(8), 1144-1149, 2007.
- 6) 村市美代子, 梶山祥子：小児病棟におけるボランティア活動の実施と看護管理上の留意点. 小児看護, 31(9), 1150-1155, 2008.
- 7) 森本克, 大野尚子, 細谷亮太：小児病棟の 12 カ月一病棟行事への取り組み一. 小児看護, 21(7), 780-786, 1998.
- 8) 大谷和子：回帰分析による看護度と看護量の関係について. 看護展望, 25(4), 106-111, 2000.
- 9) 岡本暁美, 石井まゆみ, 塚本雅子, 野中文子, 村谷圭子：小児看護業務量調査に基づく看護必要度の検討. 第 32 回日本看護学会論文集 看護管理, 249-251, 2001.